

カケ

カケイチセイ 花溪智清 加賀藩主第三代前田利常の子龍姫の法號。詳しくは花溪智清童女。

カケイハ 欠岩 江沼郡四十九院にある岩。茂敷紀聞に、この村から十町許奥の谷に欠岩がある。毎年入梅の頃岩のひたへに蛇が出るといふ。又荒谷の奥の岩でも、同じことがいはれるとある。

カゲキキヤク 薩聞役 ↓シンデンサイキ

ヨ 新田裁許。
カケサク 掛作 又は懸作とも書く。藩政の時、百姓がその居住地でない村に高を有する時、その高の存する乙村では之を甲村の掛作某と呼ぶことがあつた。

カゲサダ 景定 加賀の刀工。加州住藤原景定と切る。寛文頃。

カゲツ 荷月 ↓オホニシカゲツ 大西荷月。

カゲツイチャロン 華月一夜論 一冊。能登菅原の俳人鏡花坊著。序は明和乙酉春寒き日白達摩見風及び明和甲申夏六月無住坊、跋は南溟程巳文。明和二年十月京河南四郎右衛門等板。外題は建部涼袋の片歌二夜問答に對したもので、涼袋が東都に於いて片歌を主張したことを離し、池月坊之を問ひ、鏡花坊之に答へ、無住坊之を筆記したさまに述べてある。鏡花坊といふのは明寺智洞の俳號である。

カケツクリ 懸作 掛造とも書く。今世人が、ほしませと呼ぶ露店の如きもので、道路脇に假屋を設け、物を商うた類を呼んだらしいと説くものもあるが、寧ろ川端又は堀端に

町名に淺野川掛作りのあつた如きはそれである。前田利常の時に小松茂島掛作りとあるも、茂島の池水に張出した茶亭なのである。

カケツクリバシ 掛造橋 金澤橋梁記に、「かけづくり橋、三社」とある。此の橋は金澤穴水町の尻地長土辨通鬼川の下流に架けた橋で、それから以北が三社塚である。故に三社掛造橋とも呼んだ。此の橋爪の川の上に掛造の家があつたため橋名に呼んだのである。

カゲツテン 花月傳 一冊。俳人北枝著。此の書は俳諧詠口にてをばを初め、附合に關する芭蕉の直傳を集めたものである。序跋はない。

カゲトシ 景利 加賀の刀工。古刀期に在りては景利と切り、應永頃。新刀期に在りては、加州金澤住景利と切り、寛文頃。

カゲナイゼン 鹿毛内膳 鹿毛文内の子。文内は二千石を受け、慶長七年金澤城主・焼失の時使を勤めて焼死した。内膳は千石を受け、その子七兵衛に至り、富山侯の從臣となつた。

ガケノウヘノ 關野上野 三州名蹟誌に、昔石川郡泉野村領がけの上野に柿木・栗木林・葡萄棚、野田道右の方に油木數千株を植えて城中の燈油に供した。泉野村に後世まで栗木林あるはその遺名であると記する。これは三齋記に、元和二年の比叡與右衛門が、石川・河北兩郡の裁許を命ぜられた時のこととしてある。關野上野は後單に關野といひ、泉野新村に屬した。金澤櫻島吹上の末である。

ガケノジンジャ 關野神社 俗に關野の神明と呼ぶ。金澤十一層附近の産土神で、昔は

年神佛混濁廢止の後神職に轉じ、社號を關野神社と定めた。

ガケノヤイエモン 關野屋伊右衛門 石川郡泉野新村の農民で、古へ櫻島附近の曠野であつたのを開墾し、鎮守として神明を勧請した。これ即ち關野神社で、伊右衛門は後に至るまで數代その附近に居住した。

カケハシ 梯 能美郡板津郷に屬する部落。三齋記に、寛永十六年前田利常の小松に隱居した時町中立替り、梯橋も少し川上へ架け直したといひ、螢の光に、小松梯はそのさき板橋で幅も廣かつたが、明和中橋落ち、同八年石橋に架け替へられたとある。凶名はこの橋から起る。

カケハシガハ 梯川 ↓アタカガハ 安宅川。

カケハシジンジャ 梯神社 能美郡上牧に鎮座し、もと梯天神とも梯天瀧宮とも稱せられた。梅林院はその社僧の居る所である。初め前田利常が小松城に隱栖した後、天瀧宮がその家の鼻祖であるといふので、明暦三年から造營せしめたもので、奉行は原良忠・半田正方の二人であつた。大工棟梁は山上善右衛門喜廣が之に當り、社殿の規模すべて北野のそれに倣ひ、鎌倉末期の歸化僧・仙梵仙が費を加へた管公の肖像を神體に崇めた。次いで北野社僧松雲院能願が召し下されて別當を命ぜられ、四年二月廿四日藩臣前田權佐恒知・寺西若狹秀賢二人の奉行によつて、瀝宮の儀式を行つた。社領百石、月次歌料三十石。明治七年六月梯天神社を改めて梯神社とし、昭和十二年六月金澤尾山神社の攝社なる前田

利常の遺徳を祀るに

色澤徳太子像一幅 竪七四横三五櫃があつて、室町時代の作と認められ、重要美術品に指定せられてゐる。その外絹本彩色智神像一幅 竪一米三横五四櫃があつて、桃山乃至江戸初期と認められる。

カケハシテ 梯出 能美郡德橋郷に屬する部落。郷村名義抄に、慶安三年の比梯村の者が、小松町端の町並に家居してから、梯出村町と唱へたに起るとある。

カケハシテンジンレンガノマキ 梯天神連歌卷 能美郡梯天神の社藏で、明暦三年前田利常が松雲庵能願を本社に別當に任じ、八月廿五日利常の『千代の秋神や告げん松の盛』を發句にして興行した百韻である。

ガケハラマチ 欠原町 金澤の町名で、俗にがけと呼ぶ。此の地は大乗寺坂の高、鷹匠町の未なる崖線を通り、嫁坂・中坂・新坂高から二十人町を経て波岩寺前へ出る間の片原町である。地勢小立野の臺地より一段低く、昔は荒地であつたのを僅かに築き出し、小家を建てつられた所であつた。元祿九年の地子町肝煎裁許付に、笠舞新坂町・同がけ原・同一本松と載せた欠原は、則ちこの地で、元と笠舞の村地なるにより、笠舞がけ原と呼んだのであらう。又がけ原町といふ名は、がけ片原町の略稱であるといふ。明治十九年五月出羽町・鷹匠町の邸地が陸軍の用地となつた頃、欠原町も嫁坂以西は悉く家屋を毀ち、練兵場の地内となつた。

カゲヒラ 景平 加賀の刀工。甚六兼若(越中守高平)の長子。通稱四郎右衛門。初銘兼若を寛永五年の頃弟又助に譲つて、自ら景平